

行政院國家科學委員會專題研究計畫 成果報告

日本古代文學與外國思想、文化---『源氏物語』與儒佛道

計畫類別：個別型計畫

計畫編號：NSC92-2411-H-002-041-

執行期間：92年08月01日至93年07月31日

執行單位：國立臺灣大學日本語文學系

計畫主持人：陳明姿

報告類型：精簡報告

處理方式：本計畫可公開查詢

中 華 民 國 93 年 11 月 3 日

我自 2003 年 8 月至 2004 年 7 月探討源氏物語第一部與儒佛道之關連，於 2004 年 8 月 9 日於台大舉辦之「平安朝物語文學與漢文學」之會議裡口頭發表「源氏物語與道教、佛教---以第一部為中心」，於 2004 年 9 月 3、4 日於北海道大學發表「源氏物語與儒家思想---以第一部為中心」(將於 2005 年 3 月初版於石塚晴通教授退官紀念論文集)，請參考附件。

並將摘要整理如下：

#### 一、儒家方面：

##### (一) 人物造型：

1. 儒家所強調的「孝」出現在主人翁源氏公子的言行裡，賢木卷裡桐壺上皇駕崩時，作者再三強調源氏公子哀痛之情，並請高僧為其父皇誦「法華八經」。又在須磨卷裡，源氏將遠行至須磨時，亦前往桐壺上皇墳前稟告，處處表現出其對父皇的孝思。又其對皇兄朱雀帝的恭順友愛之情，也屢屢可由明石卷、須磨卷裡朱雀帝內心對源氏的思念看出一端。
2. 具儒家理想政治家的影像，在賢木卷裡，當源氏公子才學受眾人賞識時，他低吟道：「我文王之子、武王之弟」，而且除了源氏公子自許為周公外，桐壺帝及朱雀帝亦認為其是最理想的政治家。桐壺上皇駕崩之前對朱雀帝交代種種國事、政治之時，特別要朱雀帝須以源氏為輔佐大臣，因其具治國平天下之才能。朱雀帝在替冷泉帝選攝政大臣之時，亦認為源氏公子是最佳人選。

##### (二) 情節方面：

有兩個部分除大量引用中國典籍之外，亦富濃郁儒家思想色彩。

1. 源氏公子因蒙受不白之冤退居須磨，一年後上天以天變及各種變異來諭示朱雀帝失道。
2. 冷泉帝登基之後，不知源氏公子是其親生父親，以其為臣下，亦在薄雲卷發生各種天變。

上天以天變災異來諭示為政者失德失政的設定及描述明顯受了中國儒家「天人合一」思想的影響。

即，第一部明顯受了儒家「孝悌」及「天人合一」思想的影響。作者在描寫主人翁源氏時，除了強調主人翁的外貌、才藝之外，又擷取了儒家的「孝悌」美德，將其刻畫成一理想人物。而作者在將其理想化時，又將源氏鋪陳成一帝王型之人物，作者除在第一卷桐壺卷裡讓高麗相士說出：「這位公子的相貌看起來應是國之君主位登九五之尊者，然而若果如此，又恐國家會發生便亂而遭逢憂患，但若是以朝廷之柱石輔佐天下政治，則又與其相貌不合，預告源氏公子乃未來之帝王。然而，桐壺帝卻擔心其無後盾，招來殺身之禍，將其降為臣籍。之後，桐壺帝駕崩之後，源氏更被弘徽殿太后一千人陷害退居須磨。在毫無奧援的情況之下，讀者們亦認為源氏終將無法成為帝王之時，作者卻巧妙的配合情節導入儒家的天人合一思想，造成兩次天變，改變源氏的境遇，讓其成為准太上天皇。換言

之，深諳中國文化、思想的式部在創造源氏物語之際，除導入「孝悌」的德育，將源氏的人格加以理想化之外，更擷取天人合一思想，巧妙的實現高麗相土的預言，讓源氏登上「國之父」的地位。

## 二、道教方面：

從第一卷裡便出現「まぼろし」一詞，而「まぼろし」正是長恨歌的「臨邛道士」，除臨邛道士外作品裡一再踏襲道教的神仙故事。如松風卷裡屢次利用桂之地名，將當地喻為月宮仙境，可見作者將「酉陽雜俎」裡吳剛伐桂的故事巧妙地融入故事情節，又源氏欲前往桂之大堰會明石夫人時，紫夫人不滿地說道：「你說要去兩、三天就回來，我看可能會等到斧頭的柄都爛了呢？我不知道要等到何時你才回來。暗指源氏去後會樂不思蜀之意，這明顯是蹈襲了「王質爛柯」的神仙故事，只是這裡的仙境也具樂園旨趣，此外源氏與眾人賞月之桂院，亦被比擬為仙境。而將庭院比擬為仙境描寫地最詳盡的應是六條院，不管是用詞或鋪陳都是濃厚的仙境情趣，因此在春之町泛舟而遊的宮女不由得說出「看到如此美景，真讓人如入仙境，甚至待到斧頭的柄都爛了也不想回去哪！」「我看不用去蓬萊仙山了，一直待在這舟上就好了。」被比擬為仙境的六條院可以享受最高級的視、聽、嗅、觸等感覺方面的享受。可見作者藉由擷取道教神仙故事以提供讀者喜好新奇故事之需求外，同時亦有將中國的仙境將以凡間化，將其改頭換面成地上最高樂園之旨趣。但作者亦有將佛道融合成一體之趨勢，如若紫卷裡，源氏因患瘡疾前往北山治病時，若紫卷的「北山」某寺位於遠離塵世、雲霞環繞之深山裡面，北山裡面有「不知名的草木花卉，五彩斑斕，形如鋪棉，麋鹿出遊，或行或立」及「俗世所無的果物」及凡世難得一聞的樂聲，其設定及鋪陳接富道境仙鄉情趣。但在高峰矗立，群山環繞的岩洞裡所住的卻是「聖」，這裡的「聖」卻是聖僧之意，而非神仙，而且傳來佛堂的經懺聲。佛道融合之旨趣甚濃。

會有如此情形出現應是日本當時佛教盛行，尤其是京都有不少寺廟及僧侶，卻幾乎不見道觀道士，因此他們亦較難相信現實世界有仙境或神仙的存在，為此文學作品裡神仙傳裡的仙境逐漸轉化成佛教裡的理想世界。

## 三、佛教方面：

平安時代佛教是主要的信仰，因此《源氏物語》裡不論是出場人物的日常生活或其思想亦受其影響。

### （一）日常生活：

1. 女性們會去靈驗著稱的寺廟參拜，祈求願望達成。玉鬘卷裡便敘述玉鬘為祈求能與生父順利相見，前去石山寺參拜。又有病痛之時，更有請得道高僧為其加持之習慣。
2. 為祈求往生者能順利往生淨土，每在親人或所愛之人亡故之時，請僧侶為其誦經超渡。

可見他們認為佛教不僅可達成今生之願望亦可獲得來世之救贖。

### （二）思想方面：特別是因果論及無常觀

作品裡的人物每當出現重大事變時，除了會有深刻的無常觀，嘆「人

生無常、世事多變」外，並認為這是「宿命」，即認為自己的不幸命運是前世業障使然。

而這正是佛教裡的因果論。

亦因此，激發了他們對自己今生行爲的反省。如光源氏在若紫卷的北山段裡，聽到僧都爲自己講述人世無常之道以及來世因果報應之事後，想到自己對藤壺中宮的戀慕之心，不勝恐懼，覺得自己心中盡想些卑鄙無聊之事，此生將永遠爲此憂愁苦悶，來世更不知會受到何種因果報應。

源氏一生一直都有出家的念頭，亦是深受佛教果報思想的影響。其他對自己行爲有罪惡意識或醒悟人生無常的作中人物亦常會皈依佛門。第一部裡富濃烈的佛教因果論及無常觀的旨趣。

## 『源氏物語』における儒家思想

### —第一部を中心にして

—

『源氏物語』と儒学との関連を考える前に、まず「儒」の語源とその意味を見ておきたい。「儒」という言葉が現れるのは、『周禮』においてである。『周禮』の「天官・大宰」には「四曰儒、以道得民」とあり、その注には「儒、諸侯保氏、有六藝以教民者」<sup>1</sup>とある。又、「地官・大司徒」には「四曰、聯師儒」とあり、その注には「師儒、郷里教以六藝者」<sup>2</sup>とある。それによると、「儒」とは古代塾で郷民に六藝を教える人のことである。そして孔子がさらに古代の「儒」を「君子儒」と「小人儒」に分類して、弟子達に「君子儒」になるべしと諭した<sup>3</sup>。孔子は先王の教えを典範として、弟子達に「儒」の道を説いた先師である。それ故に、孔子を宗とする学は「儒学」と呼ばれるようになる。「儒学」は即ち「堯舜を祖述し、文武周公を憲章するとともに、五倫五常を主として、人間の日常行爲につきその実践的道義の完成に努め、仁を以て諸徳を一貫し、修身齊家より治国平天下を致すを本旨とする」<sup>4</sup>学説である。つまり、「儒学」は個人の修身によって社会の倫理秩序を維持し、治国平天下を目的とするものであり、爲政者の民衆統治に利する性格を有していた。そのため、漢武帝以来各時代の皇帝に重視され、太学などの学校で士達に学ばせる学問となる。そしてその中から成績優秀な者を官吏に拔擢したことから、立身出世の道となり、儒学経典六経四書とその関連書類は古代の士達にとって必読の書物になった。一方、日本では桓武天皇が平安京に遷都して以来、積極的に中国の文化・文明を摂取したため、儒学経典とその思想も日本に伝来し<sup>5</sup>、その影響は当時の文学にも及んでいる。たとえば漢詩文集『凌雲集』序文に、魏文帝の「文章は経国の大業、不朽の盛事なり」という言葉が見えることからそれを窺うことができる。そして『源氏物語』の作者紫式部は周知の通り、中国の文学・文化などに素養の深い文学者であり、その作品に儒学思想などの中国文化が反映していることは疑い得ない。そのため、『源氏物語』と儒学とのかわりにつ

<sup>1</sup> 周禮天官篇(周禮卷第一天官家宰上)周禮卷第一天官家宰上に「一約牧，以地得民。二曰長，以貴得民，三曰師，以賢德民，四曰儒，以道得民……」とある。

<sup>2</sup> 周禮地官篇 周禮卷第三地官司徒上に「以本俗六，安萬民，一曰爲官里，二曰族墳蕃，三曰聯兄弟，四曰聯師儒，……」とある。

<sup>3</sup> 『論語』「雍也第六」に「子謂子夏曰：『女爲君子儒無爲小人儒。』」とある。

<sup>4</sup> 参照大漢和辞典巻(一)「儒学」項目

<sup>5</sup> 藤原佐世の「日本国見在書目録」には儒教経典四書、六経の書名も収録されている。(『日本国見在書目録、経義考補正』 新文豊出版社 1984年6月)

いては、古くから様々な研究がなされて来ている。しかし、それらの研究の殆どは、制度や言葉の影響の面から考察を行ったものばかりである。もちろんその意義を否定するつもりはないが、ただ、その種の研究は、かならずしも儒学思想が物語の世界ではたす役割を究明しているとは限らない。本稿は『源氏物語』と外来思想とのかかわりを探究する一環として、特に、第一部（桐壺の巻～藤裏葉の巻）に焦点をあて、儒学思想がどういう展開の中でどのように取り入れられ、どのような機能を与えられているのかを考察し、儒教思想の取り入れに託された作者の意図を明らかにしようとする試みである。

## 二

『源氏物語』はその名の通り源氏を主人公とした物語であり、源氏はほかの古物語の主人公と同様に作者によってことさらに理想化された人物である。最初はまずその美貌と才芸が強調されている。彼は父母である桐壺帝と更衣の美しさを受け継ぎ、誕生した時から「きよなる玉」<sup>6</sup>のような美しい外形を持っている。その類まれな美しさのため、彼は世の人に「光る君」と称えられるようになる。また、七つの時、漢籍の読み方を源氏に授ける儀式を行わせた際の桐壺帝の様子は次のように叙述されている。

読書始などせさせたまひて、世に知らず聴うかしこくおはすれば あまり  
恐ろしきまで御覧ず。

源氏は美貌ばかりでなく、天皇さえ驚かせるほどの聡明さを持っていたのである。さらにその才能は学問にとどまらない。

わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲ゑをひびかし、すべて言  
ひつづけば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける

当時の貴族にとって、不可欠の教養である経書類の学問や漢詩文の制作は言うに及ばず、琴笛などでも、人より抜きん出ている。まさに多芸多才な人物として造型されているのである。

しかし、本論で注目したいのは、源氏の美貌や才芸ではなく、むしろ彼がいわゆる「孝弟」（親に孝を尽くし、兄弟に情愛を持つ）という儒家徳をも持っている点である。源氏が父兄を尊敬し、誇りに思っていることは、彼の口ずさんだ「文王の子、武王の弟」という言葉からもその一端を窺うことができる。又、賢木の巻においても源氏と兄朱雀帝との睦まじさが語られている。

---

<sup>6</sup> 本稿にある本文の引用はすべて『源氏物語』（一）～（六）に拠る。（『日本古典文学全集』小学館 昭和45年～昭和56年6月）

まづ内裏の御方に参りたまへれば、のどやかにおはしますほどにて、昔今の御物語聞こえたまふ。御容貌も、院にいとよう似たてまつりたまひて、いますこしなまめかしき気添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします。かたみにあはれと見たてまつりたまふ。(中略)よろづの御物語、文の道のおぼつかなく思さることどもなど、問はせたまひて、またすきずきしき歌語りなども、かたみに聞こえかはさせたまふついでに、かの齋宮の下りたまひし日のこと、容貌のをかしくおはせしなど語らせたまふに、我もうちとけて、野宮のあはれなりし曙も、みな聞こえ出でたまひてけり。

公務以外の私的な場で二人の打ち解けて語り合うさまが描写されている。お互いに相手に深い情愛を持っていて、たとえ尙侍の君のことがあっても二人の間に隔たりはない。二人は学問の話から、神を恐れぬ不謹慎な秘事まで打ち明けられる間柄である。兄の朱雀帝ばかりでなく、源氏は他の兄弟とも親しくしている。それは源氏が須磨に退去してからも「御兄弟の皇子たち」から「とぶらひ」の文を送られたりすることからもわかる。もちろん、兄弟ばかりではない。源氏は、父の桐壺院に対しても並ならぬ思いを持っていた。式部は特に彼を孝子とは明言しないが、物語の端から彼の桐壺院への孝子としての思いが伝わってくる。桐壺院が崩御した時の源氏は次のように描写されている。

中宮、大将殿などは、ましてすぐれてもの思しわかれず。後の御わざなど、孝じ仕うまつりたまふさまも、そこらの親王たちの御中にすぐれたまへるを、ことわりながら、いとあはれに、世人も見たてまつる。

宮中の人 は、皆一様に桐壺帝の崩御を悲しむが、藤壺中宮と源氏の悲しみは誰にもまして深い。そして法事を行う時、源氏は他の親王よりも「すぐれ」ており、そのことを世人は当然のことと受け止める。というのは、帝は生前、源氏を他の兄弟よりも寵愛しており、それに応えるように源氏の父帝に対する思いもどの親王よりも深かったからである。そのため、源氏は桐壺院の死による悲嘆からなかなか回復できず、なにかにつけて父帝のことを悲しく思い出す。藤壺中宮の兄兵部卿宮が、雪に萎れて下葉が枯れているのを見て、「かげ広みたのみし松や枯れたけん下葉散りゆく年の暮れかな」と詠んだ際、作者が「何ばかりのことにもあらぬに」と評言を加えているこの歌を聞いてさえも、源氏は悲しみをまして袖を涙でしとどに濡らす。そして、池の面が隙間もなく凍っているのを見て「さえわたる池の鏡のさやけきに見なれしかげを見ぬぞかなしき」と詠む。父を亡くした子が悲嘆するのは人情の常であろうが、源氏の桐壺院への思いは、そうした通常の人情を越えているように思える。

源氏の父院への思いは、歳月の流れによっても容易に消えない。弘徽殿大后

に謀反の嫌疑をかけられ、官位を剥奪され、須磨に退居しなければならない時にも、源氏は北山の桐壺院の御陵に参拝に行く。

御山に参りたまひて、おはしましし御ありさま、ただ目の前のやうに思し出でらる。限りなきにても、世は亡くなりぬる人ぞ、言はむ方なく口惜しきわざなりける。よろづのことを泣く泣く申したまひても、そのことわりをあらはにえ承りたまはねば、さばかり思しの玉はせしさまさまの御遺言は、いづちか消え失せにけん、と言ふかひなし。御墓は道の草しげくなりて、分け入りたまふほどいとど露けきに、月も雲隠れて、森の木立木深く心すごし。帰り出でん方もなき心地して、拝みたまふに、ありし御面影さやかに見えたまへる。そぞろ寒きほどなり。

桐壺院が亡くなってから、何年も経つにもかかわらず、源氏は院存命の時と同様の孝行の念を抱きつつ、これから須磨へ退居することを父院の亡霊に報告する。何年後に須磨から京へ戻ることができるか彼自身にもわからない、よって、今までのように、墓参りもできない、そういうことを父院に報告しながら、何故須磨へ退居しなければならないかについても源氏が説明したことは想像に難くない。又、源氏は桐壺院が臨終の際に朱雀帝に「はべりつる世に変わらず、大小のことを隔てず、何ごとも御後見と思せ」と言った遺言も思い出す。この遺言に対して、朱雀帝は決して違えないと繰り返して桐壺院に答えている。源氏はその場にいたわけではないが、まわりの誰かを通してこのことを聞いていたであろう。だが、朱雀帝は弘徽殿大后の意向に背くことができず、源氏はついに官位を剥奪され、須磨退居に追い込まれてしまった。だから、「さばかり思しのたまはせしさまさまの御遺言は、いづちか消え失せにけん、と言ふかひなし」なのである。このような状況にある源氏が「帰り出でん方もなき心地して、拝」んでいる時に、源氏の思いに父帝が感応したかのように、「ありし御面影さやかに見えたまへる」。源氏は思わずこれに寒気を感じているが、孝子が先祖や神の庇護を蒙る伝説が中国にはたくさんある<sup>7</sup>。式部は伝入した中国の書物でおそらくそれを知っていたことだろう。つまり、桐壺院が源氏の訴えを聞き入れたことを式部は読者にそれとなく伝え、須磨で桐壺院の亡霊と住吉大神が現れて源氏を危難から救う伏線を張っているのである。

須磨に退居した翌春、三月の上巳の日に、源氏が海辺で禊をしていると、急に暴風雨となる。その明方、源氏が少しまどろんだ時、誰ともわからない者が夢に現れて「など、宮より召しあるには参りたまはぬ」と言うのを聞いて、源

<sup>7</sup> 「晉書王祥伝」には「祥性至孝、母嘗欲生魚、時天寒冰凍、祥解衣剖冰求之、冰忽自解、雙鯉躍出、母又思黃雀炙、復有黃雀數十、飛入其幙、鄉里驚嘆、以爲孝感所致焉。」とある。孝行の徳が神人を感動させ助けてくれる説話は『晉書』のほかにもたくさん見られる。『魏書』にもこの項目がある。又、類書にも収録されている。平安時代人である式部もこの類の話を知っている筈である。



氏は気味悪く思う。が、この正体のわからぬ者は実は住吉大神の使者で、源氏に須磨の海岸が高潮で危ないから、早くそこを去るように指示するために来たのである。そして、その後、桐壺院の霊が源氏の夢に現れる。

かたじけなき御座所なれば、ただ寄りゐたまへるに、故院ただおはしまししさまながら立ちたまひて、院「などかくあやしき所にはものするぞ」とて、御手を取りて引き立てたまふ。院「住吉の神の導きたまふまに、はや舟出してこの浦を去りね」とのたまはす。いとうれしくて、源氏「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまざま悲しき事のみ多くはべれば、今はこの渚に身をや棄てはべりなまし」と聞こえたまへば、院「いとあるまじきこと。これはただいささかなる物の報いなり。我は位に在りし時、過つことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて、この世界をかへりみざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るに、たへがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど、かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる」とて、立ち去りたまひぬ。

源氏の墓参りによって、桐壺院の亡霊には源氏の境遇がよくわかっている。だから、生前の罪を償うまでの間はそれにかまう暇がないにもかかわらず、源氏が「いみじき愁へに沈」んでいるのを見るに見かねて、「海に入り」「渚に上り」「いたく困じ」てまで、彼を助けに翔けて来たのである。そしてこの父院の亡霊の言葉で、源氏は、前に自分の夢の中に出て来た正体不明の者は住吉大神の使者だと知り、翌日、すなおに明石入道の迎えを受け入れて、明石へと移る。父院に対する孝心を持ち続けたがゆえに、源氏は住吉大神と桐壺帝の亡霊の助力を得て、この難関を乗り越えたわけである。

このように見てくれば、作者が主人公を理想化するに際して、儒家の理想的な人間像を参照し、「孝弟」の徳を取り入れたことは明らかであろう。そして、この源氏の徳は、自らを窮地から救う最も大きな要因として機能しているのである。

### 三

源氏がその孝心によって父院の亡霊と住吉大神の助力を得、危機をしのいだのに対して、父の遺言を守れなかった親不孝の朱雀帝は父院の怒りに触れて、罰を受けることとなる。桐壺帝の亡霊が夢の中で源氏に須磨を去るように指示した後、さらに「かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる」と言ったのはこのことを指している。桐壺帝の亡霊は朱雀帝の夢の中にも現れるのである。

三月十三日。雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御気色いとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことども多かり。源氏の御ことなりけんかし。いと恐ろしう、いとほしと思して、(後略)

「聞こえさせたまふことども多かり。源氏の御ことなりけんか」とは、いうまでもなく源氏を須磨流刑に処した件についてのことである。桐壺帝の亡霊が「御気色いとあしうて」であるのもそのためだろう。朱雀帝は夢の中で自分を睨み付ける桐壺院の亡霊と目を合わせたためか、「御目わづらひたまひて」、耐え難いほどの苦しみを味わうことになる。そればかりではなく、源氏を流罪に処したために、朱雀帝は天からも警告を受ける。源氏が三月の上巳の日に禊を行わせて、八百万神に自分の無実を訴える。すると、にわかには暴風雨が起きる。

にはかに風吹き出でて、空もかきくれぬ、御祓もしはてず、立ち騒ぎたり。  
(中略)よろづ吹き散らし、またなき風なり。浪いといかめしう立ちきて、人の足をそらなり。海の面は、袞を張りたらむやうに光り満ちて、雷鳴りひらめく。落ちかる心地して、からうじてたどりきて、<sup>供人</sup>「かかる目は、見ずもあるかな」「風などは、吹くも、気色づきてこそあれ。あさましうめづらかなり」とまどふに、なほやまず鳴りみちて、雨の脚、あたる所徹りぬべく、はらめき落つ。かくて世は尽きぬるにやと、心細く思ひまどふに、

何の前兆もないのに、にわかには「世は尽きぬるにやと」と思わせるほどの暴風雨が起きている。最初はこれが源氏の境遇とどのような関わりがあるのかわからないのだが、朝廷で異変が続発するところまで読むと、この暴風雨が実は天からの朱雀帝への警告だということが分かる。このあたりについて、清水好子氏は「須磨退居と周公東遷」<sup>8</sup>で、須磨退居の話には、『尚書』「金縢」の影が落ちていると指摘している。「金縢」の原文は次のようである。

既克商三年，王有疾，弗豫。二公曰：「我其爲王穆卜。」周公曰：「未可以戚我先王。」公乃自以爲功，爲三壇同墀。爲壇於南方，北面，周公立焉；植璧秉珪，乃告大王、王季、文王。史乃冊祝曰：「惟爾元孫某，邁厲瘡疾；若爾三王，是有丕子之責于天，以旦代某隻身。予仁若考，能多材多藝，能事鬼神；乃元孫不若旦多材多藝，不能事鬼神。乃命于帝庭，敷佑四方，用能定爾子孫于下地；四方之民，罔不祇畏。嗚呼！無墜天之降寶命，我先王

<sup>8</sup> 清水好子「須磨退居と周公東遷」(『源氏物語論』塙書房 1966年)

亦永有依歸。今我即命于元龜，爾之許我，我其以璧與珪。」

乃卜三龜，一習吉。啓籥見書，乃并是吉。公曰：「禮，王其罔害；于小子新命于三王，惟永終是圖。茲攸矣，能念予一人。」公歸，乃納冊于金籥之匱中，王翼日乃瘳。武王既喪，管叔及其群弟乃流言於國，曰：「公將不利於孺子。」周公乃告二公曰：「我之弗辟，我無以告我先王。」周公居東二年，則罪人斯得。于後，公乃爲詩以貽王，命之曰鴟鴞；王亦未敢誚公。

秋，大熟，未獲，天大雷電以風，禾盡偃，大木斯拔；邦人大恐。王與大夫盡弁，以啓金籥之書，乃得周公所自以爲功、代武王之說。二公及王，乃問諸史與百執事。對曰：「信。噫！公命，我勿敢言。」王執書以泣，曰：「其勿穆卜。昔公勤勞王家，惟予沖人弗及之；今天動威，以彰周公之德；惟朕小子其新逆，我國家禮亦宜之。」王出交，天乃雨。反風，禾則盡起，二公命邦人，凡大木所偃，盡起而築之，遂則大熟。

清水氏は源氏が自発的に須磨へ退居する点と須磨に一年滞在した後、天が暴風雨で帝に源氏の潔白を諭す点は、『尚書』「金籥」における周公のそれと類似しており、須磨退居の物語には『尚書』「金籥」の影がおとされていると指摘している。しかし、「金籥」の成王は天変が起きた後、金籥をといて中の文書を読み、ようやく自分が周公を誤解したことを知ったのに対して、『源氏物語』の方では、朱雀帝は最初から源氏の潔白を知っていた。源氏を召還できないのは母弘徽殿大后の意志に背くことができないためである。だから、『源氏物語』において暴風雨は、単に主人公の無実を権力者に悟らせるためにあるのではない。むしろ、天子が失政すると天が異変を起こして警告するという天人相関思想をそこに見るべきであろう。つまり、天人相関思想のもとに暴風雨という天変によって天子に失政を悟らせているという2点に両者の類似性があるのではないか。ただ、そう考えると、『史記』や『漢書』など中国の他の書物にも天人相関思想の説や例が多く見られ、紫式部が「金籥」のみからこの思想の影響を受けたとは言いがたい。さらに、『源氏物語』では、天は源氏を召還させるために暴風雨だけを起こしたのではなく、他の警告も少なくなかったことが語られている。「その年、朝廷に物のさとししきりて、もの騒がしきこと多かり。」とあるように、暴風雨が起きる以前に、既に様々な天変が起きているのである。又、先にも触れたように、桐壺帝の亡霊まで登場させて、朱雀帝を戒めてもいる。

暴風事件や桐壺院亡霊が朱雀帝の夢枕に立ったことが起きた後でも、弘徽殿大后は依然として強硬な態度を示し、源氏はやはり朝廷に召還してもらえない。その故、天からの罰が次第に厳しくなる。まず、朱雀帝の外祖父太政大臣が亡くなった。太政大臣はすでに高齢だから、この件についてはまだ自然のことわ

りだと解釈できるが、「次におのづから騒がしき事」がある。疫病流行などのことも発生し、天下はしだいに不安な状態になる。強気な弘徽殿太后まで「そこはかとなうわづらひたまひ」で、しかも日に弱くなっていく。朱雀帝は引きつづ起きた凶兆にすっかり動揺した。これはすべて源氏に対して不公平な処分をしたための天罰だと心得ている。「なほこの源氏の君、まことに犯しなきにてかく沈むならば、必ずこの報いありななんとむおぼえはべる。今はなほもとの位をも賜ひてむ。一日も早く源氏を召還して、元の位を授けるべきだ」と度々言うが、太后はあくまでも強気の一方である。そのため、性格の弱い朱雀帝も母后を憚って赦免の宣旨が下らない。朱雀帝が躊躇している間に、太后の病情がさらに重くなってしまふ。

そして、源氏を召還しないため、天からいつそうきびしい罰を受けるようになる。

年かはりぬ、内裏に御薬のことありて、世の中さまざまにののしる。

次の年になって、もっと悪いことが起きた。今度朱雀帝自身まで病気になり、世間ではいろいろ大騒ぎする。朱雀帝はついに退位するに決めた。

何故朱雀帝は退位しなければならないのか。作者は読者に納得させるためにさらに去年からの朝廷の様子を次のように説明を加えている。

去年より、后も御物の怪悩みたまひ、さまざまの物のさとししきり、騒がしきをいみじき御つつしみどもをしたまふしるしにや、よろしうおはましましける御目の悩みさへこのごろ重くならせたまひて、もの心細く思されければ...

朱雀帝はずっとたよりにしている母太后の病情が重くなるし、世の中では、疫病が流行し、異変が続発して、物情騒然たる状態になっている。それに天皇自身の目の病気も悪化した。朱雀帝は心細くなり、すでに今まで通りに国を治めることもできなくなり、ついに退位することにした。しかし、朱雀帝自分自身の子供は二才になったばかりで、次の天皇の人選としてはまったく幼すぎるから、今の東宮に帝位を譲ることにした。そして、摂政大臣の人選についてあれこれ考えめぐらした結果、やはり源氏が一番ふさわしいと考え、朱雀帝はついに太后の意向を無視して源氏を召還することにした。

こうして、源氏の実の子は天皇に即位し、源氏自身も摂政大臣になって、世の中はすべて源氏の方に有利になるようにかわって来た。しかし、冷泉帝は源氏が実の父であることを知らないがゆえに、源氏を臣下として仕えさせる。これは孝を重視する儒家の教化に背くことでもあるし、聖帝の徳を損ねる行為に

もなるから、再び天変が起きた。

薄雲の巻には次の記事がある。

その年、おほかた世の中騒がしくて、公さまにものさとししげく、のどかならで、天の空にも、例に違へる月日星の光見え、雲のたたずまひありとのみ世の人おどろくこと多くて、道の勘文ども奉れるにも、あやしく世になべてならぬ事どもまじりたり。内大臣のみなむ、御心の中にわづらはしく思し知らるることありける。

天はよく天変をもって天子の失政を悟らせることは、人もよく知っていることである。ところが、今度の天変は一体天皇に何を悟らせようとするのか、判然としない。源氏一人だけは心当たりがあるが、冷泉帝に言うわけにもいかない。しかし、冷泉帝が知らなければ改めようもない。そのため、天罰が続く。聽って、数の祈祷と齋戒を行ったかいもなく、藤壺中宮があっけなく世を去った。源氏の悲しみはいうに及ばず。冷泉帝もなんとなく心細い。古くから藤壺に近侍した聖僧は帝が事実を知らずに源氏を臣下として扱い続ければ、天罰が厳しくなる一方で、やがて帝の身にも及ぶのではないかと案じて、ある静かな暁、ついに冷泉帝に出生の秘密を知らせる。

天変頻りにさとし、世の中静かならぬはこの気なり。いとときなく、ものの心知ろしめすまじかりつるほどこそはべりつれ、やうやう御齡足りおはしまして、何ごともわきまへさせたまふべき時にいたりて、咎をも示すなり。よろづの事、親の御世よりはじまるにこそはべるなれ。何の罪とも知ろしめさぬが恐ろしきにより、思ひたまへ消ちてし事を、さらに心より出だしはべりぬること。

僧都は天変が起きたのは、帝が実の父源氏を臣従させたためだと言った。冷泉帝が幼かった間は物の道理も理解できなかったので、事なきを得たが、今はすでに何事も理解できる年ごろになったから、知るべきことを知らないと、天に咎められる。

読者達は前からすでにこのことを知っているのだから、ついに来るべきことが来たという気持ちでその続きを読んでいく。作者も読者の期待を裏ぎらないような書き方をする。冷泉帝は事実を知った以上、勿論このまま源氏を臣下として扱うことができない。しかし、いきなり子として名乗り出すのもきまりが悪いから冷泉帝は態度で源氏に自分がすでに事実を知ったことを示す。賢明な源氏も冷泉帝が自分に対する態度がにわかに子の親に対するそれにかわったことに気付き、もしかすると例の秘密を知ったのではないかと不安に思う。帝はさらに様々な書物を調べ唐土に『史記』の秦始皇と母太后、呂不韋との関係を見

附け出し、源氏に譲位することを言い出した。それは源氏にとめられたが、冷泉帝はやはり源氏を臣下扱いしたくないから、藤裏葉の巻で源氏を准太上皇にした。田中隆昭氏に指摘されるように、物語の中での源氏・藤壺・冷泉帝の三人の関係は確かに『史記』の中の呂不韋・太后・秦の皇帝をもとにしているが<sup>9</sup>、秦の始皇帝の母太后に対する孝行は天罰を恐れるために行った行爲で、冷泉帝の源氏に対する孝は内心から発した真情そのものを感じさせる。聖帝冷泉帝の孝行は暴君秦の始皇帝との孝行とは著しく異なっている。

そして、天変地異で冷泉帝に源氏が実の父であることを悟らせることによって、源氏も名実ともに「国の親」の位にのぼるのである。

紫式部は『源氏物語』の第一部で二回も儒家の天人相関思想を取り入れた。それぞれは朱雀帝と冷泉帝の時におきたできごと。そして二回とも帝に源氏を公平に扱わせるために導入したのである。第一回は、源氏が無実の罪で須磨退居をよぎなくさせられた時である。朱雀帝は源氏の無実を知っていながら、弘徽殿太后の意向に背くことができないため、源氏を召還できない。すべてが行き詰まった時、作者が天の力を導入して天変地異を起こさせる。しかし、朱雀帝は天変の原因を知っていながら、決断力を出して源氏を赦免できない。そのため、天罰がしだいに厳しくなり、ついに帝の身に及び、朱雀帝は心身ともに続けて政治を行うことができない状態に陥ったから、冷泉帝に譲位してしかも源氏を摂政大臣として召還した。第一回の天変地異は式部が源氏を中央へ復帰させるために導入した装置なのである。

その後冷泉帝は天皇に即位したが、出生の秘密を知らなかったため源氏にしかるべき地位を与えていない。そこで、作者はもう一回天変を取り入れて冷泉帝に源氏が実の父であることを悟らせた。そして、冷泉帝が事実を知ったことによって、源氏も準太上皇の位に上ったのである。

この二回の天人相関思想はいわば源氏を最高地位につかせるために導入した装置とでも言えよう。

## 結び

『源氏物語』には様々な儒家思想が取り入れられるが、ここでは特に第一部と「孝弟」、「天人相関思想」とのかかわり及びその機能を考察してみたが、残される問題はまだまだ多くある。しかし、凡そ、次のことは言えよう。

作者は主人公を造型するに際して、儒家の基本的徳育も取り入れて源氏を美貌、才芸ばかりではなく、さらに「孝弟」の美德をも持つ理想的な人として語り上げる。又、作者は単なる主人公を理想化するだけでなく、彼を帝王になる人物として設定したのである。早く桐壺の巻で、作者はすでに高麗人の相人をして源氏の未来について「国の親となりて、帝王の上なき位に上るべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。よほやけのかたみ

<sup>9</sup> 田中隆昭「源氏物語と史記」(『中古文学と漢文学Ⅱ』汲古書院 昭和62年)

となりて天の下を輔弼くる方にて見れば、またその相違うべし」と語られせた。即ち読者達には首巻ですでに源氏が帝王になることが予告されたわけである。しかし、彼はその後臣籍に下ったし、父帝も母后も亡くなったし、後楯も何も無いから、到底帝王になれるとは思われない。そこで、作者はプロットの進展に合わせて巧妙に儒家の天人相関思想を取り入れて、二回も天変を起こさせ、源氏の境遇を変え、「国の親」の位に就かせたわけである。言い換えると、中国文化、思想に素養の深い式部は源氏物語を創作するに際して、儒家思想を強く意識し、「孝弟」という徳育を取り入れて、源氏の人格を理想化するのみでなく、さらに天人相関思想を導入して、みごとに高麗相人の予言を実現し、源氏を「国の親」の位に上らせたとも言えよう。